


news 

—東北生産性本部—

第37回仙台シンポジウム11月例会開催

テーマ「最近の朝鮮半島情勢と日本の対応」



■ 11月例会（11月7日開催）

★講師 静岡県立大学国際関係学部教授
静岡県立大学現代韓国朝鮮研究センター
所長 伊豆見 元 氏

第37回仙台シンポジウム11月例会は、静岡県立大学現代韓国朝鮮研究センター所長 伊豆見 元 氏を迎え、67名の皆様の参加を得て開催致しました。

講演では、『最近の朝鮮半島情勢は、現在、2014年5月29日のストックホルム合意の履行課程にあるが、日本のマスコミは「拉致問題」しかとりあげない。これも当然大きな課題であるものの、本来、「核問題」と「ミサイル問題」の3点セットで、日本の防衛上の観点からも大変大きな問題であり、現在の「拉致」のみを問題視した日本

のマスコミ報道は、諸外国から見るとおかしく見えている。

北朝鮮の行方不明者調査についても「拉致」だけではなく、戦後、北朝鮮での行方不明者等も含まれている。

いずれ「拉致問題」が解決したとしても「核問題」と「ミサイル問題」が解決しない限りは、北朝鮮との国交正常化には繋がらない。今後、どうなるかわからないが、楽観できない、以前として難しい課題となっている。

そのような中で、北朝鮮の隣の韓国は、「核問題」について、そもそも同じ民族として北朝鮮は韓国に「核は落とさない」と楽観視する傾向があり、追い詰められた北朝鮮という状況を十分理解していない。

また、日本にとっては、北朝鮮が核実験を行うことで、偏西風に乗って放射性物質等が飛来するのではという心配もある。

しかし、北朝鮮の一番近隣にあり、その脅威にあるはずの韓国と日本が、「核問題」を大きな問題として取り上げ動いていない中にあるのは、米国も「核問題」を大きく取り上げて、動くことができない現状にある。

北朝鮮は、狭い国土の中で核実験を行う場所が無くなっており、外交のカードとしては、「核実験」ではなく「核能力誇示」を示しながら対応している情勢にある。

一方、日韓関係については、韓国の日本への依存度が無くなり、まさに対等化の中で、歴史問題等をはじめ「決して許さず、決して忘れず」というスタンスにある。

すでに日韓関係が構造変化しており、来年は、戦後70年を迎えるが、韓国は、中国に歩調を併せた対応を示してくるものと思われる。いずれ昔の日韓関係にはもう戻れない。こちらも今後、どうなるかわからないが、以前として難しい対応を迫られることになる。」と話されました。

以上、大変有意義なご講演をいただき、参加者の皆さまを含めましてご協力に衷心より感謝申し上げます。

今回、新たに担当となりました村山です。前任の吉田さん同様に、ご支援とご協力を切にお願い申し上げます。(村山 拝)

< 第37回仙台シンポジウム 今後の予定 >

例 会	テーマ	講師
12月2日	どうなる日本の政治と経済	読売新聞特別編集委員 橋本五郎 氏

*全例会とも会場は仙台商工会議所会館7階大会議室、時間帯は14時から15時半です。今後の各例会に参加ご希望の方は、東北生産性本部（TEL022-261-0411）までご連絡下さい。